

【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	香川県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	池田町立池田中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	1	7	19
生徒数	50	56	55	1	162	

研究の概要

1. 研究主題

より「確かな学力」を育むための教科指導の工夫・改善
ー学びあう場の設定を通してー

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

全学年、英語・数学・理科において、習熟度別少人数指導による、個を生かす授業の工夫・改善
平成13年度より香川型指導体制パイロット校としての継続研究

全学年、全教科において、「学びあう場」の設定による個に応じた指導方法・指導形態の工夫改善
生徒に基礎的・基本的な内容を習得させ、自ら課題を見つけ、自ら考えさせるとともに、他者の評価を自己理解・自己評価につなぎ「確かな学力」を身につけさせることができる指導方法・指導形態についての研究・実践

全学年、全教科において、観点別評価を生かした指導のあり方
学校課題として、平成13年度より継続研究

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ より確かな学力を定着させるための教科指導のあり方</p> <p>仮説 個に対応し、個々の生徒の学力を向上させ、個々の生徒の要求にこたえるためには、単なる少人数でなく習熟度別の少人数指導が効果的である。</p> <p>研究内容・方法 数学、理科、英語を中心として、習熟度別少人数授業の研究を進める。 ・基礎的・基本的内容の定着を図る効果的な指導法を工夫する。 ・発展的な学習内容についての研究と実践をする。 個を生かす評価のあり方と指導方法を工夫する。 ・13年度に作成した評価規準・基準をもとにした、評価方法の研究・実践を進める。 ・観点別評価をもとにした、一人一人の生徒に対するきめ細かな指導方法の研究を進める。</p>
--------	--

平成15年度	<p>テーマ より「確かな学力」を育むための教科指導の工夫・改善 －学びあう場の設定を通して－</p> <p>研究の見通し（研究仮説） 教師が「学びあう場」を学習指導過程の中に効果的に設定することで、基礎的・基本的内容の習得とともに、自ら学び、自ら考える力を身につけさせることができるであろう。</p> <p>研究の内容・方法 学習活動に受け身的な傾向が強い本校の生徒に、自分の意見を表現するとともに他の人の意見と比べることで、自らの考えをさらに高めていけるような力を身につけさせたい。 また、教員の指導力向上というねらいもある。授業研究の視点を「学びあう場の設定」におくことで、他教科の学習指導に関しても、生徒相互のかかわりや、生徒の自己評価や学習意欲などの観点で意見交換ができ、教師相互の指導に生かすことができると考えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自ら学び、自ら考える力の育成に効果的な「学びあう場」の設定 ・ 習熟度別少人数指導による、個を生かす授業の工夫・改善（英語・数学・理科） ・ 相互評価から自己理解・自己評価へとその内的理解を高めていけるような指導方法・指導形態の工夫改善 ・ 観点別評価（特に関心・意欲・態度）を生かした指導のあり方 <p>基礎的・基本的な内容を確実に習得させるための「学びあう場」の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 評価方法の研究・実践とその評価を生かした指導のあり方 ・ 発展的な教材や補充的な教材の開発とその指導法
--------	--

平成16年度	<p>テーマ より「確かな学力」を育むための教科指導の工夫・改善 －学びあう場での評価と指導のあり方－</p> <p>研究の見通し 「学びあう場」を設定しようとする意識は高まってきた。その場が、単なる話し合いで終わることなく、学習内容の習得を高めることのできるような場面にしていく。</p> <p>研究の内容・方法 個に応じた評価方法とそれを生かした指導のあり方 評価の場面とそれを生かした指導のあり方</p>
--------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

(1) 教師の指導の変化

教師中心の授業から、教師と生徒が創り上げる授業への意識の変化が見られるようになった。

「学びあう場」を効果的に授業に取り入れるようになった。

相互評価を充実させるために、ワークシートの工夫や座席の工夫等に積極的に取り組むようになった。

意見を言いやすくするため、スピーチを取り入れたたり、学習内容に応じてグループの編成替えをしたりするなどの配慮をするようになった。

(2) 生徒の学習態度の変容

人の意見をよく聞き、自分の考えをもつことができる生徒が増えてきた。

間違いを恐れずに自分の意見を発表するようになった。

自分の考えをもって、班活動に臨むことができるようになった。

生徒相互の言葉かけ(コミュニケーション)が増えた。

積極的に話しあおうとする態度が育ってきた。

(3) 保護者の期待

学力向上に関して、習熟度別少人数でのきめ細かい指導方法について、約90%の保護者が期待している。

(4) 県学習状況調査の結果より

	学 年	数学			理科			英語		
		1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
平成 14 年度	県平均	79.5	69.3	75.4	72.0	81.2	71.2	80.4	76.6	76.9
	本校平均	84.5	79.6	79.9	74.6	81.1	71.1	83.5	86.8	76.6
	差	(+5.0)	+10.3	+4.5	+2.6	-0.1	-0.1	+3.1	+10.2	-0.3
	学 年	2年	3年		2年	3年		2年	3年	
平成 15 年度	県平均	72.6	73.8		68.7	66.3		76.4	76.8	
	本校平均	73.4	84.8		73.7	72.4		79.6	87.5	
	差	+0.8	+11.0		+5.0	+6.1		+3.2	+10.7	
	学 年	2年	3年		2年	3年		2年	3年	

*平成14年度1学年数学の本校平均は未履修の範囲を除いて算出している。

(分析)

全教科において、県の平均正答率を上回っている。

特に、第1学年から習熟度別少人数授業を行ってきた本年度の3年生では、3教科とも5%以上、上回っている。昨年度の調査と比較しても、県の平均正答率からのプラスへの開きが大きくなっている。

本年度の2学年は、正答率分布から見ると、正答率下位の生徒が多いが、その学年においても同様で、県の平均正答率からのプラスへの開きが大きくなっている。

2. 今後の課題

(1) 「学びあう場」を学習指導過程の中に効果的に設定し、基礎的・基本的な内容の習得ができるようにするために、教えるべき内容と学びあう中で考えさせるべき内容の区別を明確にする必要がある。

(2) 生徒の自主的・自発的な活動を重視する「学びあう場」をより効果的にするためそこにいたるまでの指導過程についても十分考慮しておく必要がある。

学力把握のための学校としての取組

- 1 学習状況調査（年度始に実施）
- 2 学習診断テスト（3年は年5回と総合診断2回、1・2年は年1回実施）
- 3 単元ごとの観点別小テスト（各教科、各単元で実施）
- 4 定期テスト（年間5回実施）
上記調査やテストにより、個々の観点別習熟度や全体の傾向を把握し、少人数クラス編制や指導法の改善、また、個別指導に役立てる。
- 5 生徒、保護者に対する意識調査（学期に1回、アンケート、また、教育相談を実施）
授業に対する関心や意欲について、個々の状況を把握すると共に、保護者から家庭での状況についての調査をして、個々の生徒への指導法の改善を図る。

